

PECS の FAQ (よくある質問集)

<http://www.pecs.com/PECS-FAQ.htm> より

(2006/10/22 門真一郎訳 ; 2007/04/22 最終修正)

この翻訳に関しては、米国ピラミッド・エデュケイショナル・コンサルタント社のアンディ・ボンディ先生と日本ピラミッド・エデュケイショナル・コンサルタント社の服巻繁先生からホームページ掲載の許可をいただきました。

目次

実施に関する全般的な問題	・・・p.1
フェイズ	・・・p.4
フェイズ	・・・p.6
フェイズ	・・・p.8
フェイズ	・・・p.10
フェイズ	・・・p.12
フェイズ	・・・p.13

実施全般

Q.1 PECS 開始に先立ってひとりひとりに何を準備する必要がありますか？

A.1 PECS をうまく実施するために最も重要なことは、強力な好子のセットを決めることです。強力な好子が決まったら、最初の2つのフェイズで、教えるのも教わるのも容易になります。好子が決まったら、その好子アイテムが自由に手に入らないように気をつけておかねばなりません。もし好子アイテムがいつでも手に入るなら、最初の PECS のレッスンで、それが高度に意欲をかきたてるモノにはならないでしょう。最初のセッションを始めるまでに、アイコンを作っておく必要があります。PECS の初期段階では、シンボルのセットは問題ではありません。再製作や保守がしやすいシンボル・セットを決めることをお勧めします。シンボル・セットに変更が必要になったら、それはフェイズで行いません。

Q.2 私が PECS をしようと思っている人は、マッチングができません。マッチングができるようになるまでは、PECS の実施を延期すべきでしょうか？

A.2 「コミュニケーションの取り方」と「コミュニケーションの持続のさせ方」という、重要なコミュニケーション・スキルを教えることから PECS を始めます。PECS のこの最初の2フェイズでは、1枚の絵カードを使うことから始めます。これら重要なスキルを教えるには、一度に1枚の絵カードを使って教えます。これは正常な言語発達に沿っています。幼児は、初めてのことばが出るよりもずっと前から、コミュニケーションを取ること

ができます。同様に、《コミュニケーションのアート》をまず PECS で教え、それからフェイズ で語彙を増やすことに焦点を合わせるのです。したがって、マッチングのスキルは PECS を始めるに当たって必要ではありません。フェイズ でアイコンの弁別を教える際に、特別な教え方を用います。その教え方は、様々な見本合わせ〔マッチング〕のレッスンをまだ習得できていない子どもに有効なことがわかっています。

Q.3 模倣、特に音声言語の模倣についてはどうですか？

A.3 模倣はきわめて重要なスキルです。自閉症や関連障害の子どもの多くは、模倣能力がとても低いのです。模倣には、身体動作（例：手を叩く）、物の操作（例：ボールをバウンドさせる）、発声行為（例：音声やことば）の模倣があります。これらの行動の1つを子どもが模倣しない場合、そのスキルを教えることはとても重要なことです。しかし、私たちの主要な前提の1つは、効果的なコミュニケーションができるようになるためには、言葉の模倣ができる必要はないというものです。私たちが関わってきた子どもの多くは、PECSによって重要な機能的コミュニケーション・スキルを獲得し、その間に音声模倣も含め模倣スキルが伸びました。子どもたちの多くは、音声模倣スキルが大いに伸びたら、文カードで作った文に対応することばの模倣ができるようになったのです。しかし、私たちの観察では、子どもたちは模倣スキルを獲得しつつある間でも、依然として言葉で機能的にコミュニケーションをとることはできなかったのです。したがって、私たちが力説したいことは、子どもにPECSを教えている間、親やスタッフは模倣スキルを教えることを重視し続けることです。しかし、一番よいのは、レッスンごとに教えるスキルは1つにすることです。ですから、PECSと言葉模倣のレッスンは混ぜるべきではありません。PECSを使って要求することは、理に適ったコミュニケーション形式として尊重されます。模倣に取り組む機会は、1日のうちのいつか別の時間に設けるべきです。多くのスタッフや親は、コミュニケーションが不必要な活動の中で音声模倣に取り組み続けます（例；玩具が思いのままに使える自由遊びの時間に）。多くの先生が、朝の集まりのルーティンを使って、時には歌の中で、あるいは他に何か習慣になっている活動の中で、ことばや音声の模倣を促しています。要するに、PECSと模倣トレーニングとの間に対立はありませんし、あれかこれかという二者択一の問題ではありません。

Q.4 一人一人に応じたシステムにすべきですか、それともクラス単位でのシステムにすべきですか？

A.4 子どもは一人一人が自分専用のコミュニケーション・システムを持つべきです。それはどこに行くにも子どもについて行きます。あたかも子どもの身体の一部であるかのようです（車椅子や整形外科用靴のように）。そして子どもは自分のコミュニケーション・システムに関して責任を持つことを学ばねばなりません。ある場面から別の場面に、教師や親がコミュニケーション・ブックを持って移動すべきではありません。メニューや部屋毎

のシステムもきわめて有用です。これはボードの形にして、その場に特有の語彙を含めます。例えば、お風呂場のボードには、せっけん、タオル、風呂場用の玩具の絵カードを貼っておきます（そのような絵カードが、好子を表していたり、ルーティンの中で教えた語彙を表していたりするなら）。さらに言うと、複数の絵カードを貼るのは、子どもがフェイズ（弁別）を習得してからです。冷蔵庫のドアには、いろいろな食べ物の絵カードを貼っておくこともできるでしょう。学校では、運動のエリアのボードに、道具の絵カードを貼っておけるでしょう。忘れてはならない重要なことは、場面専用のボードがある家庭や教室を出るときには、携帯できるシステムが子どもには必要だということです。このことの意味は、そのようなボードに貼ってある語彙の絵カードの多くについては、同じものをその子のコミュニケーション・ブックにも入れておく必要があるということです。家庭で役に立つことが分かっている方法の1つは、コミュニケーション・ブックの中のページを、《メニュー》ボードとして使い、家の中のいろんな場所に掲示しておくというものです。こうすれば、外出するときに、各ページを集めてコミュニケーション・ブックにもどすだけで、さっさと出かけることができます。

Q.5 PECS が適しているのはどんなタイプの子どもや大人ですか？

A.5 今のところ、どんな人に PECS が適しているかを正式に評価する方法はありません。しかし、いくつかの基本的な問が役に立つかもしれません。

1. その人は、現在しかるべき機能的コミュニケーション・システムを持っていますか？
すなわち、その人は、自分の欲求や要求を他者に伝えることができますか？
2. その人が伝えようとしているメッセージを、他の人たちは常に理解していますか？
3. その人が現在使っている言語構造は、その人に必要な複雑さに達していますか？
言い換えると、その人が伝えるメッセージは、その人にとって重要な詳細をすべてカバーしていますか？
4. どのような条件下で、その人はコミュニケーションを取っていますか？
自発的？ 応答的？ 模倣的？ 機能的コミュニケーションと言えるものならすべて、自発的なコミュニケーション・スキルと、さまざまな問への応答のコミュニケーション・スキルを含みます。

上述の問のいずれかの答が「いいえ」なら、その子どもは PECS の候補者です。絵カードを交換する運動スキルを持ってさえいれば。

フェイズ

Q.1 トレーニング・セッションは、どれくらいの時間続けなければなりませんか？

A.1 一言で言うと、その子どもの興味を引くことができる限りです。1 試行しかできないこともあれば、子どもの自発が続く限り 20 試行でも実施できることもあります。あなたが見せるものに子どもが興味を失ったら（すなわち、アイテムに手を伸ばさなくなったり、交換を始めようとしなくなったりしたら）、次の方法のいずれかをとることができます。

1. 好子を換えて、セッションを続ける。
2. セッションを終える。

PECSのセッションを始めるに当たって知っておくとよい秘訣は、飽和状態〔訳注：欲求が満足された状態〕になったり、飽き飽きしてしまったりする前にセッションを終了することです。レッスンのポイントは、子どもの意欲（モチベーション）が高いときにコミュニケーションを子どもが学習することであり、《この新しいスキルをあなたが教えたいから子どもが学習する》のではありません。

上述の選択肢の2番目は、トレーナーの1人が、《従来型の》言語訓練セッションを行っている言語聴覚士の場合には、ジレンマを引き起こします。《従来型の》言語訓練セッションは通常 20～30 分行ないますが、もし早々に切り上げられると、他の人たちが予定を調整しなければならなくなります。このために、そして他の理由もあって、PECSトレーニングを行なう言語聴覚士にとっての《サービス提供》モデルとして最もよいと私たちが思うのは、機会が生じたときはいつでもセラピストが使えるが、子どもとのやりとりに一定責任時間を費やさないでよい統合的モデルです。言語サービスが統合された場面では、セラピストは通常、教室の日課に積極的に関わります。そしてその結果、セラピストは、通常の教室活動の中で子どもとやりとりをすることになります。

フェイズ のセッション/トレーニングでは、トレーナーは2人必要となるので、トレーナーを2人用意することがもう1つの制約となります。もう1人のトレーナーがその場を去らねばならないために、セッションを短縮しなければならない場合もあります。セッションがひとたび終了したら、次のトレーニングの機会を作るまで、アイコンは取り去るべきです。

Q.2 フェイズ では何枚の絵カードを使うのですか？

A.2 絵カードの数は、好子アセスメントと、フェイズ の習得に必要な試行/セッション等の数によります。1枚の絵カードを使って、10回以内の試行でフェイズ を習得する子どもや大人を、多く見てきました。だから、そういう場合、使った絵カードは1枚だけで

す。もっと時間の必要な子どもの場合、絵カードの数は、子どもが非常に好むアイテムの数や、フェイズ のトレーニング中の活動に子どもがどのように関わるかによって決まります。もし、好子アセスメントで、とても好きなアイテムが5つ確認できたら、その5つのアイテムをフェイズ ですべて使うべきです（ただし、1度に1つのアイテムとその絵カード）。一方、2、3のアイテムしか確認できなければ、その2、3のアイテムと絵カードだけを使います

Q.3 はじめてPECSを実施するときは、おやつのような1つの場面だけで絵カードを使うべきですか？

A.3 フェイズ のトレーニングの最初の試行は、通常、とても構造化された状況で実施します。それまでの活動から子どもを取り出して、フェイズ を教えることもあるでしょう。もし、トレーニングの初日にフェイズ が習得できなかったら、いろいろな場面でトレーニングを行なうことが大切です。忘れてはならないこと：このトレーニングを行なうためには、トレーナーを2人用意することがきわめて重要！

Q.4 フェイズ にかかなり長い間取り組んでいますが、子どもはアイコンの交換を自力で行なうことができません。何が問題なのでしょう？

A.4 フェイズ でスキルを習得してもらうためには、以下の点に取り組む必要があります。

1. あなたが使っているアイテムをアセスメントしましょう。そのアイテムは本当に好子になっていますか？ もう一度、好子アセスメントを行なって、一日を通して好子が《自由に（タダで）》手に入らないように、トレーニング環境作りをしっかりと計画しましょう。
2. 交換を教えるのに、トレーナーを2人用意していますか？ 最初のトレーニングを正しく行っていないと、たいていの子どもは自力で交換できるようにはなりません。
3. 子どもがアイテムに向かって自発的に行動してから（すなわち、手を伸ばしてから）、交換をプロンプトしていますか？

可能性のある問題点を明らかにして、教え方を修正しましょう。

注意：一部の子どもは、学習速度がとても遅い。あなたが教えている子どものスキル習得速度がとても遅いなら、PECSについても、その習得はとてもゆっくりしたものかもしれません。しかし、好子を正しく選べば、習得ペースはたいてい速くなるでしょう。忘れてはならないことは、好子は子どもの視点で決めるのであり、決してトレーナーの視点で決めてはならないということです。

フェイス

Q.1 授業中、生徒には席を立てほしくないのですが、持続性というスキルは重要で教えなければならないこともわかっています。この2つを両立させることはできますか？

A.1 機能的コミュニケーション・システムとしてことばを使える子どもは、さまざまな手段で私たちの注意を引きます（例：挙手する、私たちを呼ぶ、私たちのところにやってくる、私たちの肩をたたくなど）。PECS を使っている子どもたちも、必要なときに私たちの注意を引くために、同様の手段のいくつかを教わらなければなりません。その必要性を満たすために、世間に受け入れられる手段を教えないと、別の手段〔訳注：しばしばいわゆる問題行動〕を見つけるにちがひありません。あるいは、子どもたちは、私たちの注意を引こうとはしなくなったり、コミュニケーションに関して受身の態度をとったりするようになるでしょう。すべての教室で秩序は重要な側面であることは認めつつ、他の授業をできるだけ妨げないでフェイス を教えることができる時間を見つける必要があります（例：運動場で、自由時間のとき、選択時間のときなど）。コミュニケーションを取るために席を立つことを重視し、それが、世間では受け入れられないような行動に取って代わる望ましい行動となるようなレッスンを計画することもあります。言いたいことは、「柔軟であれ。そして子どもに持続性を教える方法を、できれば2つ以上見つける努力をせよ」ということです。確かに、部屋を横切ることは、コミュニケーションを持続させる1つの方法ですし、挙手しコミュニケーション・パートナーを待つことは、もう1つの方法でしょう（挙手していることにコミュニケーション・パートナーが気づく場合だけ、挙手は有効だということは忘れないように）。もう1つちょっと忘れてはならないことは、このシナリオでの子どもはいつもコミュニケーション・ブックを持っているはずだということです。それなら1日を通しての移動量は減るでしょう。しかし、とくにお勧めしたいことは、コミュニケーション・ブックを常時持たない場合に、それを一定の場所に置いておくことを特別に教えることです。

もし、子どもが「逃げ出す」ことをあなたが心配しているなら、子どもが席を立ったときに（そしてこの行動があなたの標的になっているなら）、やってみるとよい方法の1つは、コミュニケーション・ブックを教室の出入り口とは反対の位置に置いておくことです。あるいは、子どもがいつも走って行くのとは別の場所に置くことです。こうすると、子どもが席を立ったら、正しい方向に（コミュニケーション・ブックのある方向に）向かっているのか、逃げ出そうとしているのかを、すぐにアセスメントすることができるでしょう。

Q.2 運動障害のある子どもの場合はどうでしょうか？ どうすればコミュニケーション・システムを持続させることができるでしょうか？

A.2 コミュニケーション・ブックやコミュニケーション・パートナーのところまで移動することができない子どもには、同じスキル（コミュニケーションを持続させること）をち

よっと違ったやりかたで教えます。このような子どもは、コミュニケーション・ボードやブックが 1 日中子どものそばになければいけません。運動計画スキル motor planning skills 次第で、コミュニケーション・ブックは車椅子の背面や側面にかけておいてもいいでしょう。コミュニケーション・ブックのために移動性がさらに妨げられるようなことがあってはなりません。そこで、このような子どもたちがコミュニケーション・パートナーに近づく方法を考えなければなりません。このスキルを教えるために、私たちはさまざまな呼び出しスイッチを使ってきました。指導手順を少し変えなければなりませんし、やはり身体プロンプターに頼ることになります。まず（コミュニケーション・パートナーを呼ぶ）スイッチを押すことを子どもに教えます。そしてアイコンを交換する前にコミュニケーション・パートナーを待つことを教えます。初めのうち、待ち時間はごく短めにしなければなりません。その待ち時間で子どもがうまくやれてから、待ち時間を長くしていきます。ベルや他の信号装置を使っているチームもあります。こういったものを使うときは、子どもが教室や家庭でそれを使えるようになって、その音や信号に周囲の人が耐えられるということを確認しておくべきです。

フェイズ

Q.1 弁別レベル(フェイズ)をいつ始めるかは、どのように決めるのですか？

A.1 フェイズ は PECS トレーニングの全期間を通じて続けなければなりませんので、当然ながらフェイズ とフェイズ とは一部重なります。例えば、絵カードを渡すためにコミュニケーション・パートナーのところまで行くことは習得したのですが、絵カードを取りに行くことは未だ習得中という場合、弁別トレーニングを開始してもかまいません。しかし、忘れてはならないことは、一度に行なうレッスンは 1 つだけにすべきだということです。フェイズ で新しいレベルの弁別に積極的に取り組んでいるときには、子どもに移動をさせるべきではありません。フェイズ に焦点を合わせたレッスンは別にしてスケジュールに組み込むべきです。忘れてはならない重要なことは、フェイズ には終わりがないということです。PECS の決定的に重要なことは、子どもは粘り強いコミュニケーター - コミュニケーションをプロンプトされるのを待つ人ではなく、口うるさい人〔絵カードうるさい人〕 - になることです。子どもにコミュニケーション・ブックを手渡したり、子どものところまで行って絵カードを受け取ったりすることは、子どもが依存するようになる合図です。6 - 12 枚の絵カードをフェイズ で使えるようになったら、弁別トレーニングを始めます。絵カードは一度に 1 枚だけ提示してきたことと、1 日のうちでも好みが変わったら絵カードも変えてきたことを思い出してください。

Q.2 新しい語彙を加える時期はどのように判断するのですか？

A.2 好子アセスメントを頻繁に行なうと、新しい語彙を加える必要があることがわかります。一度に提示する絵カードは 1 枚だけにしての限り、フェイズ と で使う絵カードの数に限りはありません。フェイズ でも、これまでに使ったのと同じ絵カードをすべて使いますが、子どもが取り組んでいる弁別レベルでということです。役に立つことは、好子アセスメントを行なうことと語彙選択用ワークシート (PECS トレーニング・マニュアルの中にあります) を使うことです。応答やコメントを導入してからは、子どもが習得できる速さで新しい語彙を加えていくことができます。

Q.3 私が関わっている子どもはフェイズ でつまづいてしまい、弁別は絶望的です。他に方法がありますか？

A.3 他の方法を考える前に、フェイズ を教えるために使ってきたトレーニング手順を、チームでアセスメントすることをお勧めします。

1. とても好きなアイテムと好きではないアイテム、あるいは状況に関係のないアイテムが

ら始めましたか？

2. 4ステップ・エラー修正法を一貫して用いましたか？
3. 弁別トレーニングでの新しい行動はすぐに強化しましたか？
4. 効果を判断するのに十分な時間をかけて、上記のやり方を粘り強く続けましたか？ このレベルのトレーニングに十分なだけの試行を、毎日行ないましたか？
5. さらに、このレベルのトレーニングの機会と、これまでに習得したレベルのトレーニングの機会とを、1日を通して毎日行なっていくべきだということを、肝に銘じてください。

フェイズ a(弁別トレーニングの最初のレベル)を正しく実施しても、記録上進歩が見られなかったら、別の方法を探すべきです。使える別の方法はいずれも、レッスンの一部(すなわち、選択肢の示し方)を変更します。そのような変更は、子どもがうまくやれるようレッスンに加えるプロンプトの変更という形をとることがよくあります。うまくできるようになったら、こういったプロンプトは控えていかなければなりません。弁別トレーニングの別のやり方については、2デイ・ワークショップのレジюмеや PECS トレーニング・マニュアルで復習して下さい。

フェイス

Q.1 好子アイコンを文カードに貼る前に、ください アイコンを文カードに貼るのは、もし正しい順序で並べていたら OK ですか？

〔訳注：原文は好子カードと ください カードが逆ですが、日本語の語順にして訳しました。それでよいとボンディ先生はおっしゃっています。〕

A.1 トレーニングのこの段階では、文カードを正しい順序で子どもが「読み続ける」あるいは指差すかぎり、この反応を正しいと考えます。この行動については、後々のトレーニング（属性以降）で3枚以上のアイコンを使うときに、よく注意しなければなりません。依然として重要なことは、正しい並びで絵カードを文カードに貼ることでしょう。文カードに貼る絵カードがどんどん増えるにつれ、絵カードの正しい並びが子どもには分からなくなったら、文頭にくるカードから順に文カードに貼っていくことを教えなければなりません。忘れてはならないことは、これが行動連鎖のエラーだということであり、したがってバックステップ・エラー修正法が必要だということです。一部の子どもは、両手で同時に文カードを作る - 片方の手で ください アイコンを取り、もう片方の手で好子アイコンを取る - ことをします。2枚の絵カードを同時に文カードに貼りつけるのです。これも、かまいません。実のところ、このやり方で時間が節約でき、文カードを早くコミュニケーション・パートナーの手の中に入れることができるのです。

Q.2 誰が文カードの絵カードをはずしてコミュニケーション・ブックにもどすのですか？

A.2 最初は、コミュニケーション・パートナーが文カードの絵カードをはがし、絵カードと文カードをコミュニケーション・ブックにもどすべきです。そうやって、次の使用の準備をします。ボックス使用者にそれをさせることは、コミュニケーション行動を不必要に遅らせることになります。中には、絵カードを自分でもどすことにこだわる子どももいます。これは素晴らしいことです！ このことは、子どもが地域活動に参加するにつれて、当然のことながら習得する必要があることです。絵カードと文カードがなくないうちに、文カードを 素人のコミュニケーション・パートナー から取り返すわけです。このスキルを教えるときは、ことばのプロンプトではなく（例：「あなたの絵カードをかたづけなさい」）、身体プロンプトとジェスチャーを使うことを私たちは勧めます。このレッスンに加える身体プロンプトあるいはジェスチャーは、ことばのプロンプトよりはるかにフェイド〔控えていくこと〕しやすいはずですし、この新しいスキルにより、できるだけ早く自立を促進することになるでしょう。

Q.3 私に関わっている子どもは、文カードを作りながら、あるいは私が文を読んでいる間、声を発するのですが、一貫性がありません。

A.3 フェイズ およびそれ以降は、ことばを促す上では分化強化に頼ります。PECS のこの段階で、時々、声らしいものが聞かれたり、明瞭に発音されたことばが聞かれたりすることがあります。遅延プロンプト法により、発達しつつあることばのスキルを使う機会を子どもに与えることができます。このようなことばやことばらしきものが出たときには、好子を増やしたり、アイテムで楽しむ時間を長くしたりします〔分化強化〕。子どもへのメッセージは、「ことばは素晴らしい、でもことばを発することが容易ではない時でも、機能的コミュニケーション・システムは働き続ける」というものです。

Q.4 いつ属性を導入するのですか？

A.4 属性は、フェイズ が終了してから（すなわち、子どもが自力で「_____ + ください」という文を作って、文カードをコミュニケーション・パートナーと交換できるようになってから）導入します。この時点で、特定の属性に基づき、子どもの視点から重要となる好子の特定を、チームは始めるべきです。最初は、色・サイズ・形をよく導入します。同時に、質問への応答（フェイズ ）に関するレッスンもアレンジするべきです。そのレッスンは、あなたが計画する属性レッスンとは別に行ないながら、属性が焦点になっている PECS 手順の残りを続けることが重要です。

フェイズ V

Q.1 自発的要求がとても上手なので、「何がほしいの?」とすぐに質問することができない場合があります。この質問への応答スキルをどうやって教えればよいのでしょうか?

A.1 これはよくあることです。このスキルを教えるために、トレーニング環境を少し変更してみます。PECS のフェイズの多くで、トレーニング・セッションの初期に、レッスンに関するアイコンをコミュニケーション・ブックの表紙に貼ることを、私たちはよく勧めますが、そうすると、ご質問の行動を実際には促進するかもしれません。その子のアイコンは、ください アイコンも含め、すべてコミュニケーション・ブックの中にしまいましょう。こうすると、アイコンを手にとることが少し遅れますので、あなたに質問の時間ができるでしょうし、コミュニケーション・ブックを開けるための遅延プロンプトになるでしょう。このことは、必然的に文構成の始まりとなります。やはり1日を通して自発的要求の機会を必ず与えることが大事です！

フェイズ VI

Q.1 子どもはみな、フェイズ にたどり着くのですか？

A.1 チームでアセスメントして、人的好子が子どもにとって有力ではないことが分かったら、フェイズ を延期することもあります。多くの子どもや大人にとって、最強の好子を自発的にも応答的にも要求できるようになることは、とてつもない成果であり、そのことによって、とてもほしい物を穏やかに手に入れることができるようになるのです。コメントの段階に入っていくと、新しいことばや概念を教える機会を、たくさんもつことができます。しかし教育期間中の、あるいは人生のこの時点で、その人にとって最も重要なニーズと合っていないかもしれません。

Q.2 私に関わっている子どもは、高度に構造化された場面ではコメントすることができるのですが、レッスンをどんなに創造的なものにしても、自発的にはコメントしようとしません。さまざまなコメント質問に答えてコメントすることで終わっても OK でしょうか？

A.2 これは前述の質問と似ています。人的好子では格別意欲が高まらない人の場合、よくこういうことが起こります。構造化された場面では、新しい語彙や概念をコメントによって教える機会が豊富に持てることでしょう。そして将来いつか、こういった人的好子が重要になり、自発的コメントが出てくるようになるかもしれません。それは誰にも分かりません。忘れてはならないことは、いろんな場面で、いろんなコメント・レッスンを計画して、コメントは、高度に予測可能な場面だけではなく、さまざまな場面で使うことができるスキルだということを教えましょう。